

名城大学 経済・経営学会会報

No.22

『名城論叢』
第六巻 第二号 付録
二〇〇五年一月三〇日
名城大学 経済・経営学会 発行

二〇〇四年度 第二回
交換留学生講演会……… 洪井康弘
郭一類
于海洋
緒方亜季
二〇〇五年度 交換留学生体験記
(フランス) …… 堀畑正樹
アニス・トレヴァン
シエリナ・カリライ
9

二〇〇四年度 第二回 交換留学生講演会

経済学部 洪井 康弘

以下に掲載するのは、二〇〇四年一二月に開催された交換留学生講演会でのスピーチ全文です。この講演会は、二〇〇三年夏に初めて開催されて以来、今回で通算四回目となります。講演者は北京第二外国語学院からの留学生である郭一類さんと、于海洋さん。さらに今回は、名城大学から北京第二外国語学院に一年間留学して帰国した本学の学生・緒方亜季さんにもスピーチをお願いしました。

郭さんと于さんは、二〇〇四年四月に来日した時には不安そうなお顔を浮かべ、まだ幼ささを感じられるような留学生でした。しかしその二人も、留学生生活の苦労の中で日に日にたくましくなっていました。傍から見ても、はつきりと成長のあとが感じられたものです。そのことは彼女らも自覚していた

ようで、今回のスピーチから、二人がどのような困難を経験しながら成長していったのかをうかがい知ることができました。多くの日本人学生の前に立って日本語で話をするだけでなく、日本人というものを客観視して論評しようという姿勢も見られ、堂々としたスピーチであったと思います。

緒方さんは、本学から北京に留学した直後にSARSの大流行に直面し、一度日本に戻りました。この極めて稀な経験が、彼女にとっては、自分と中国との関係を深く考える重要な機会となったようです。SARS終息後に再度北京に留学した彼女は、貴重な留学経験を存分に生かすべく、より一層意欲的に勉強しました。SARSの大流行という予期せぬ事態に直面したことが、結果的には緒方さんを大きく成長させていたことがわかります。

このように今回の講演会では、三人の留学経験者が、三者三様の成長の過程を語ってくれています。スピーチを聴いた学生たちにも、良い刺激になったことでしょう。ここにスピーチ全文を掲載しますので、当日出席できなかった皆様も一読ください。

(1) 忘れない思い出——日本での経験記——

北京第二外国語學院 日本語学部 郭 一穎



去年の十一月まで、日本に来て留学生として日本で勉強したり、生活したりできなんて、夢にも思いませんでした。

日本での留学生活に憧れていましたが、私の周りに、外国での生活経験を持つている人は一人もいなかったし、親元を離れて、ひとりで外国生活ができるのか、生きていけるのか、と常に不安な気持ちで一杯でした。ですから、北京二外の先生に、交換留学生として日本へ一年間勉強に行ってみないかと聞かれたとき、喜びとともに不安な気持ちも湧いてきました。あれこれ考えていたら、何もできぬ何日かを過ごしたのち、母の励ましの言葉を深く考え、思い切って留学の道に踏み込むことを決心しました。

今年の四月一日、初めて飛行機に乗り、興奮と不安を伴いながら、ついに日本という首を長くして待ち望んだ国に到着しました。今でもその当時の状況をはっきり覚えています。私は瞬き一つもせず、絶えず頭や体を回して、この私にとってすべてが新しい物事の世界を見ていました。学校に着いたとき、寮長が親切に優しく荷物を運んでくれたり、国際交流センターの係員が熱心に案内してくれたりしたときには、思わず涙がこぼれそうになりました。そして、寮長を通して名城大学の中国人留学生と知り合いました。

一二月で、日本での留学生生活九ヶ月目を迎えました。この九ヶ月間の経験を振り返ってみると、確かに、さまざまなくさんの思い出があります。そのうちのいくつかは、私にとって一生忘れられない思い出になると思います。それらの思い出は、留学生活でなくては経験できないものだというだけではなく、人間として、自分の目標に向かって努力するということを教えてくれました。

その一つは、四月二四日に行われた、経営学部・経済学部主催のデイハイイクという活動です。先生に誘われて私も参加しました。そして、非常に多くの事を収穫しました。春日井キャンパスから天白キャンパスまで三〇キロ歩かなければならない上に、始めてまだ一週間もならなかったアルバイトも休まなければならぬので、もともとは参加するつもりはなかったのです。しかし、せっかく日本に来た交換留学生として軽はずみに先生の誘いを断ることもできないし、宿舎の自分の部屋を片付けているときに、先輩が去年デイハイイクに参加してゴールまで歩いた証明書を見つけました。どうしようかと迷った結果、新たな自分にチャレンジするつもりで、デイハイイクに参加することにしました。そして、活動の前日、深夜二時までアルバイトをしました。当日朝七時の集合に遅れずに、みんなと一緒にゴールまで歩きぬきました。

三〇キロの距離を歩くのは、昔の人にとっては多分なんでもないことかもしれませんが、現代人にとっては、車や自転車などに乗らなくてわざわざ足で三〇キロあるくなんて、デイハイイクのような特別な活動でもないかぎり、誰もしいでしょう。

特に、私のような中国の三〇代以下の若者で、一気に三〇キロ歩くことを経験した人は、ほとんどいないと思います。ですから自分も、気楽に最後まで歩くことができるとは思っていませんでした。なぜ気楽に歩き続けることができたかという点、先生が紹介してくれた日本人の学生さんのおかげです。みんなとおしゃべりしながら歩いたので、体の疲れを全く感じませんでした。一日を歩きとお喋りの中で過ごし、あつという間の時間でした。途中、一緒に歩いていた日本人の学生さんに「大丈夫？」と聞かれて、「うん、初めてだけど大丈夫ですよ」と答えました。それからすぐに、いろいろな話題に夢中になり、それらの話を通して、本当に日本のことを多く知ることができました。そして、自分の日本語も、日本に来たばかりのときに比べると上手になったのではないかと感じました。

正直に言えば、三〇キロ歩いたのは確かに辛かったです、その辛さの中から人間の強さと成功のうれしさを味わうことができたのではないと思います。デイハイクを行う本当の目的はいつたい何でしょうか。歩いた人にはわかるはずですが、それは自分の意志と戦うことだと思えます。

中国では大学の新入生は、一〇日間から三ヶ月間、軍事訓練を受けなければなりません。ですからもちろん私も一年生のときに軍事訓練を受けました。一〇日間の短期訓練でしたが、その間に三回泣いたのを覚えています。わずかの一〇日間なのに、私にとつては一〇年のように長く、なかなか終わらなくて、地獄のように感じられた一〇日間でした。今でもすごく辛い思い出です。しかし、それを経験したからこそ、北京でのひとり

の寂しい生活にも慣れることができました。そしてデイハイクを経験したからこそ、私はより強くなり、困難な問題に直面しても、強く対応できるようになりました。ですから、デイハイクは単に日本での思い出というだけでなく、私の人生にとつても、非常に大切な経験なのです。

二つ目に、アルバイトのについてお話しします。留学生として、アルバイトをするのは当たり前だと思われていますが、もしアルバイトをしなければ、生活ができなくて、わざわざ外国に来て大学とか大学院とかに入る意義を失ったかも知れません。外国に来る本当の目的は、もちろん知識の勉強ですが、それよりも大切なことが社会を知る勉強だと思います。特に、中国の学生にとつては、もつとも大切なことだと思えます。なぜならアルバイトを通して、社会の複雑さを知ることができるからです。私もアルバイトを経験しました。時間は短かったですが、アルバイトを通して、さまざまな人と接し、さまざまなことを経験し、辛いこともあれば、楽しいこともありました。そして社会と人間関係の複雑さがわかるようになりました。生まれて初めてのアルバイトは、週に三日間でした。そのうちに二日は夕方六時から翌日の朝二時まで働かなければなりません。そして、中華料理屋だったので油の煙が非常に多く、タバコと油の煙にむせて、咳が出たり、目が痛くて涙が止まらなかつたこともよくありました。いくら咳が出て、目が痛くても、休みの時間もないし、一生懸命に働くしか仕方がありませんでした。その店でのアルバイトは本当に大変でした。ですから、新しいアルバイトが見つかる、そこはすぐにやめまし

た。今振り返ると、おそらくそこでのアルバイトは、日本での最も辛い思い出になったのではないだろうかと思います。

うれしかったのは、料理を運ぶとき、お客さんに優しく「ありがとう。中国人ですか？ 頑張つてね！」と声をかけられたことです。料理を運んでも、何も返事してくれない冷たい人もいて、そういう人のテーブルには二度と近づきませんでした。でもお客さんに「ありがとう」とかけられると、アルバイトの疲れも、不愉快な気持ちも風に吹かれたように、たちまちどこかに去ってしまいました。それからアルバイトを始めたばかりのときは、「いらつしやいませ」とか「ありがとうございませ」という言葉が、恥ずかしくてなかなか口から出せませんでした。日本ではコンビニやスーパーなどに行つたとき、店員さんはお客さんに元気よく「いらつしやいませ」とか「ありがとうございませ」と声をかけますが、私はそういうことにあまり慣れていませんでした。「いらつしやいませ」はいいけど、なぜ買い物をしたお客さんに「ありがとうございませ」といわなくてはいけないのか、ということについてずっと疑問でした。中国では、店員さんは絶対言ってくれません。ですから、日本人の挨拶は大げさではないかというような気がしました。今は自分のアルバイト経験を通してその理由がわかりました。日本では働いている人は、会社のことを自分のこととして考えています。つまり、自分が生きていくにはまず会社を安定させていかなければなりません。会社を安定させるためには、お客さんに会社の商品を買ってもらわなければなりません。だからお客さんが商品を買ってくれたら、感謝の気持ちを込めて「ありがとうござい

ます」というのです。

デイハイクとアルバイト以外にも、もちろん多くのことがありました。六月に一人で初めて業に行つて、名古屋のにぎやかさを感じたこと、八月にゼミの皆さんと合宿に行つたこと、母に似ているアイグரி先生とゆっくりお喋りをしたこと……思い出すと、本当に数え切れないほど多くの忘れられない思い出がぐるぐると頭の中で回って何を言つたらいいのかわからなくなりました。しかし、日本での生活が、私を大人らしく成長させたのは確かです。ここでの経験を私は一生忘れることができせん。

(2) 日本で得た宝物——自信——

北京第二外国語学院 日本語学部 于 海洋



冬の深まりとともに、年末がだんだん近づいてきます。気がつくと、日本に来て、もう八ヶ月半になりました。四月に来日したときには、心細くて、色々なことに戸惑っていました。それから今まで長い間で短い間に私はどのぐらい成長したのでしょうか。振り返ってみると、日本で過ごしてきた生活と伴にさまざまな想いが頭の中に浮かんできました。

中国では独特な一人っ子政策のため、私には兄弟がいません。小さい頃から、両親に甘やかされてきましたので、住み慣れた

古里を離れ、一人で日本に留学するのは私にとって想像できないほど大変なことでした。でも、大学で日本語を専攻していた私にとつては、名城大学に一年通うことで、日本語の勉強に役立つことはもちろんですが、自分自身の体験を通じて、日本のあらゆる面のことに接触できると思えました。そう考えた上で、日本に来ることに踏み切りました。

飛行機は広々とした日本海を越え、日本に着陸しました。私は飛行機を降りて、三〇キロの荷物を自分の手にさげた瞬間、これから、真新しい生活が始まり、いくら苦しくても、他人に頼らず、自分の足で自分の道を歩まなければならないとはつきり感じました。私は来日早々、中国人留学生にアルバイトを勧められました。日本での留学生活は、日本人の大学生のようにアルバイトをすると、社会の難しさを体験できるし、自分の意思を鍛えられそうだったので、私はアルバイトを探し始めました。コンビニから「From A」を買ってきて、そのぶ厚い情報雑誌を一生懸命読んでいました。学校の時間に合うバイト先に電話をかけましたけれども、日本に来たばかりだったので、全部断られました。最後の最後に名古屋駅構内にあるきしめん屋さんに「中国人留学生でも構いませんか?」と問い合わせました。幸いなことに、向こうは「大丈夫ですよ。よかったら、明日来てください」と返事してくれました。その時、言葉で表せないほどうれしかったです。

飲食店で働く、まずお店のメニューを覚えなければ仕事が進みません。ですから、私は余暇を利用して、料理の名前と値段をセットで暗記しました。二回目にお店に行ったとき自信

満々だったのに、お店の料理人から作ってもらった美味しそうな料理を見てポカーンとしました。きしめん屋さん提供する料理はほとんどきしめんですから、様々な種類を含めて、それぞれの中身を知らないメニュー通りに運ぶことができません。日本人にとつては、料理の名前を見て、料理の中にどんなお肉や野菜が入っているか、すぐに判断できるかもしれませんが、私にはさっぱりわからなかったもので、少しづつ勉強しなければなりません。周りのバイトさん達はみんな仕事の流れを身に付け、完璧に接客していました。でも私は料理の名前をしつかり覚えていませんでしたし、おつちよこちよいの性格もありますから、ついついミスしました。もう辞めようかと迷っていたところ、「自分に負けないように頑張ろう」という、耳の奥に残っている母の言葉を思い出しました。「そうだ、どんなことでも、始めたら最後まで一生懸命取り組みなければならぬ」と思い、その時から、気を取り直して、わからないところを恥かかしながら先輩に聞きました。時間が経つにつれて、だんだんなれるようになってきました。アルバイトなんてたいしたことではないけれども、今振り返ってみると、いろんなことを体験し、いろいろ感じました。頑張っていく道に思ってもよらない困難が次々に襲いかかってくる可能性もありますので、ねばり強く、自分に負けないようにと頑張ってやるのが一番重要なことだと思います。どんなことが起こっても、自分のことを信じて、いろんな困難を乗り越えましょう。挫折に打ち勝つことよって、自分がどんどん成長していくのだと思えます。

大学一年生の時、北京大学に通っている友達のところへ遊びに行く途中道に迷いました。誰かに尋ねようと思いましたが、向こうから歩いてくる人々は用事に追われているように慌しく通り去ってしまいました。しかし、そこに赤い松葉杖をついているおばあさんがゆつくりと歩いていて、ぶつかってしまいました。私はおばあさんに聞きました。「すみません、北京大学へ行きたいんですが、どういけばいいですか？」と聞くと、おばあさんは耳が遠かったのかもかもしれませんが、いやそうな顔をして、何も言わず、首を振りながら、去ってしまいました。結局時間が大分かかり、友達との約束の時間には着けませんでした。日本に来たばかりのとき、外国人登録証明書を作ってもらったため、区役所に行かなければなりませんでした。国際交流センターの職員の鈴木さんから簡単な地図を書いてもらいましたけれども、三叉路の道が目の前に現れると、ちよつと自信がなくなり、やっぱり聞いたほうがいいかなあと思つて、歩いているおばあさんに近づいて「すみません」と挨拶しました。そのおばあさんは説明が終わると、「気を付けてね」と微笑んでくれました。おばあさんの心をこめた笑顔を見た瞬間、私は心が暖かくなるのを感じました。そのおばあさんだけでなく、日本人々は礼儀正しく、優しいので、外国人にとっては、非常に住みやすい国だと思います。

しかし、日本人どうしの間では、人と人との心が遠くなっているのではないかなとも思います。

私たちの人生は結局のところ様々な人間関係にほかなりませんが、いろいろな関係の中で、友情は特に人間的な関係です。

同じ職場で働いている上司と部下とか、同じ講義を受ける学生とか、単に多数の人が集まって共同生活をするけれども、お互い友達とは言えないと思います。会うと丁寧な挨拶したり、仕事で疲れて、一緒に食事をしたりということがよくありますが、他人の心の世界に入ってみようと考えたことがあるでしょう。建前の友情ではなくて、心と心との親密な触れ合い、言葉で言い表せない共感、他のものを気にしない純粋な信頼の気持ちは、人生において最も重要なことだと思います。決して、すべての日本人ではありませんが、少数の人は自分のことは自分のことだ、他人のことは他人のことだと思つていてのではないかと、私は感じています。単に表面的なことを考えるのではなく、お互いの真実をぶつけ合う素直な気持ちを持つて、心のもつとも深いところで信頼を築きましょう。

(3) 私の見た中国の姿

名城大学 経営学部国際経営学科 緒方 亜季



私が中国北京に降り立ったのは二〇〇三年二月。お世話になった北京第二外国语学院は、以前も大学のフィールドワークで訪れた場所ではありませんでしたが、はじめは言葉が分からない上、初めて経験する一人暮らしに生活は困難を極めました。授業は毎日八時から二時までであり、午後は主に日本語学科の学生と相互に学習す

る時間に充てていました。生活のリズムがつかめない中で毎日予習、復習をこなしていくのはかなり大変でしたが、先生方やクラスメイト、中国人の友達に助けられ一ヶ月経った頃、漸く授業にもついていけるようになりました。

丁度その頃、友達や親から治療法のない感染症が南方で流行っているのが北京も気をつけた方がよいとのメールや電話が頻繁に入るようになりました。現地のテレビや新聞といったメディアでは全く報道されておらず、それほど心配はしていないが、三月末に北京市長による情報隠蔽が発覚、WHOの調査員が北京入りするなど、事実が一つ一つ明らかになつてくると、北京の様子は一変しました。学校や街では、まことしやかな噂が流れ、スーパーは買いためする人でごった返し、北京の街はどこも消毒の臭いに包まれるようになってきました。私も外出時にはマスクを二重にし、帰宅すると手が荒れるほど何度も洗い、出来る限りの事をしましたが、死亡者、感染者が増加するにつれ、感染するかもしれない、いやもう感染しているかもしれないという不安や恐怖心がいつもついてまわりました。学校では先生によるSARSの予防法などの指導もありましたが、留学生はその恐怖心で毎日何十人という単位で帰国するようになり、授業も成り立たなくなっていました。そして私も精神的な不安から帰国しました。

帰国後も依然としてその勢いが衰えない北京の様子をテレビで目にしながら、今も大学の外へ一歩も出ることを許されない友達や北京の人々の事を心配すると同時に、北京で過ごしてきた日々を思い出し、自分が本当に中国が好きであり、またあの

場に留学したいという思いが募っていました。

幸運にも八月SARSは沈静化し、友達との再会とともに、新しい留学生活がスタートしました。残りの留学期間は半年、この現実には、私は今まで以上に積極的になりました。語学の勉強だけでは勿体無い、ここでしか出来ない事をして帰りたいと、週末は一人でバスや地下鉄を乗り継ぎ、北京を見て回る事が習慣となりました。

中でも北京で展開している小売業について自分なりに調べてみようとして、現地のスーパーマーケットや現地に進出している外資系のスーパーなどあらゆる店舗を見て回ったことは印象的です。勿論学生が調査するには限界がありますが、片道二時間のスーパーマーケットへも顧客の一人として度々訪れることで、様々な発見がありました。大量の油と多くの調味料を使った北京特有の食文化、中国の正月にあたる春節近くになると店内には商品が天井まで積み上げられ多くの人でごったがえし、街は華やかな赤一色の飾り付けになり伝統文化を感じました。

又、会員制のスーパーマーケットでは、高級外車で乗り付け、カート一杯に商品を入れ、カード一枚で買い物をしていく人もいれば、一般の市場で一角（一・五円）単位の駆け引きを繰り返し、値段に納得がいかに買うのを止める光景も目にしました。

北京では確かに、二〇〇八年の北京オリンピックも決まり、着々と建設が進んでいます。その一方で、これらの発展がこれまで以上の格差を生んでいるほか、環境汚染や文化財の破壊

など様々な問題を深刻化させている事も事実です。

しかし、このような時代の変化の中にあっても、知らない人同士が気さくに声を掛け合い、笑ったり、悲しんだり、時には助け合う光景にこの国の人々の温かい思いやりの心が伝わってきます。また大学生の多くは、母国を愛し、国の発展に自分が貢献できることを願って勉強に打ち込んでいました。中国で日本が失いつつあるものを教えられた気がします。そして、これが中国という国の魅力であり力なのではないでしょうか。

〈おわりに〉

講演中、中国人学生と日本人学生の違いはどうだったのかという質問を頂きました。中国に留学し、強く印象に残っているのは、やはり現地の学生と日本の学生との勉強意識の違いでした。

中国の学生は、自分達が将来どういうものを目指し、そのために、大学で何を勉強するのかという意識を常に持っています。授業の始まる一時間前の七時に、寒い公園で本読み(外国語)の練習をし、授業では最前列に座るためにいち早く教室に向かう。夕方は図書館の席を確保するために走り、夜は消灯時間以降勉強するために、小型スタンドを持ち込んで深夜まで勉強するなど、留学当初から中国の一般的な学生の姿と日本の学生の姿とのギャップに驚き、また刺激を受けました。

そして、中国人学生と交流するに従って見えてきたのは、彼らの意識の中核に、中国の発展に寄与したいという、強い希望と願いがあることでした。

先程も述べましたが中国は、急速な発展を遂げる一方で、内陸部には未だ発展しているとは言いがたい地域が多く存在しています。中国全土では、格差問題が広がり、環境汚染問題なども深刻化しているのも実情ですが、その中で今、中国の発展が日本を追い越す日は近いと言われていている理由は何でしょうか。それは、単に発展の度合い、そして技術力というものではなく、むしろ国民一人一人の意識の中にあり、それらが力となって中国の発展に繋がっているのではないかと思います。

私は海外に出たことにより日本を客観的に見ることができ、また様々な国の留学生や地元の人々と交流することが出来ました。多様な考え方を知り、人の温かみを知る。これらは今の日本ではなかなか味わうことが出来ないものです。私は、もうすぐ卒業を迎えますが、中国に限らず、世界各国に今後一人でも多くの学生が留学を経験して頂けることを願っています。

最後となりましたが、この留学の機会を与えていただきました名城大学にあらためて感謝の意を表したいと思います。